

原 著

歯科衛生士教育に期待される教育内容の検討

内田 智子^{1*}, 大野 由香¹, 中石 裕子¹, 坂本まゆみ¹, 野村 加代¹, 和食 沙紀¹

要約：歯科衛生士教育の充実や強化，卒業すぐに起用できる学生の養成等，社会からのニーズや期待が高まっている。本学2年次には，専門的知識や技術を実践し，応用力や医療人としての自覚を高める場である臨床実習が行われる。今回，臨床実習先の指導者である歯科医師と歯科衛生士によって記載された臨床実習評価表の自由記載部分を KJ 法により質的に内容を分類した。そこから歯科衛生士教育へ期待する内容をまとめ，今後の教育内容を検討した。実習に対する評価には，意欲的に学ぶ姿勢，診療の流れを把握，自発的に補助につけていた等の内容だった。実習に対する指摘には，明確な行動目標が立てられていない，基礎的知識に乏しい，コミュニケーション力が足りない等の内容だった。考えられる教育内容の検討として，1．本学と実習先が共通理解を深める教育内容や指導項目の検討，2．臨床実習Ⅰ期から臨床実習Ⅱ期へ指導の引き継ぎについての検討，3．学内実習の充実，4．学年を越えた実習の在り方の検討の必要性が明確となったので報告する。

キーワード：歯科衛生士教育，教育内容の検討，臨床実習の評価

はじめに

歯科衛生士学校養成所の指定規則¹⁾が一部改正され，平成17年4月1日を施行日として，平成22年4月1日までにすべての養成機関は，2年制から3年制以上となった²⁾。本学は3年制へ移行し10年となる。社会からは，世の中のニーズや状況変化に対応するため，歯科衛生士の資質向上が図られて³⁾いる。また歯科衛生士教育の充実や強化，卒業すぐに起用できる学生の養成等，歯科保健医療の活性化を図る観点からの期待⁴⁾も高まっている。

歯科衛生士養成校のモデルとなるカリキュラム案である歯科衛生学教育コア・カリキュラム⁵⁾には，卒業までに学生が身に付けておくべき必須の実践能力（知識，技能，態度）の到達目標が提示

されている。しかしながら，3年以上の教育課程のすべてをそれにあててを理想としている訳ではない。歯科衛生学教育コア・カリキュラムに示された内容を習得した上で，残りの時間は各学校独自の特色ある学習プログラムを準備することが望まれている。

歯科衛生士養成教育の中でも臨床実習は，学校で学んだ基礎知識や技術を実践するだけでなく，応用力や社会経験，また医療人としての自覚を高める場としても貴重な経験となる。

臨床実習に関して，指導者から提示される評価表を用いた研究には，吉田⁶⁾による指導者が学生を評価する「指導者評価表」，学生間で評価する「相互評価表」，学生自身による「自己評価表」を用いた研究がある。それは，臨床実習実施の前後に

¹⁾高知学園短期大学 医療衛生学科歯科衛生専攻 *Email: tuchida@kochi-gc.ac.jp

行う学内指導を充実させていくための検討や、用いた評価表そのものの目的や使い方を工夫や改善をしていくというものである。また、海老名⁷⁾による、臨床実習の事前自己評価と事後自己評価を集計、分析して、今後の学習課題を明確化するという研究がある。この研究は学生自身の自己評価と指導者による指導者評価を示したものを基に、臨床実習の成果と反省を行い、学生の課題を明確にして、以後の学内実習または臨床実習において教育効果があったと示したものであった。これらは調査対象を学生と指導者で、選択式の評価項目を用いた方法で集計を行った量的な研究が多くみられた。

そこで今回、臨床実習の指導者からの自由記載による評価項目のみを用いて、社会および臨床現場から求められている歯科衛生士学生像を明らかにし、検討することとした。その結果から、現状の教育について良い点や改善が必要である点を明らかにし、教育内容の検討を行いたいと考えた。

本学2年次後期で行われる臨床実習Ⅰ期の実習目的は「講義で学んだ理論を基に医療機関ではどのように行われているか診療の流れを把握して体験し、歯科衛生士業務の基礎的な能力を養い、併せて医療技術者としての望ましい人間性を身に付けること」である。また、同じく2年次後期で行われる臨床実習Ⅱ期の実習目的は「円滑な診療を行うために共同動作がいかに大切に効率的に行われているかを理解し、この実習を通じて歯科予防処置、歯科保健指導及び歯科診療補助の実際の方法を学び、歯科衛生士業務の基礎的な能力を養い、併せて医療技術者としての望ましい人間性を身に付けること」である。これらの臨床実習評価表から、歯科医師と歯科衛生士が歯科衛生士教育に期待する内容をまとめ、今後の学内の教育内容を検討することを研究目的とする。

研究方法

1. 対象者

平成28年度の本学2年次後期に行われた臨床実習Ⅰ期と、臨床実習Ⅱ期の実習先歯科医院で指導

者であった歯科医師と歯科衛生士を対象者とした。対象者のうち、歯科医師は60名（100%）、歯科衛生士は45名（75%）からの研究同意を得た。また、平成28年度2年次生の学生37名（100%）から、評価表の研究利用について同意を得た。

2. 調査内容

平成28年12月5日から平成29年1月14日に実施された29日間の臨床実習Ⅰ期の臨床実習評価表と、平成29年1月24日から3月4日に実施された34日間の臨床実習Ⅱ期の臨床実習評価表を用い、歯科医師と歯科衛生士により自由記載された「学生の注意すべき点」の内容を分析した。

3. 分析方法

平成28年度臨床実習評価表の「学生の注意すべき点」に自由記載された内容をKJ法によって質的に分析を行った。

4. 倫理的配慮

臨床実習評価表の本研究への利用については、対象者に口頭及び文章で説明し、同意を得た。研究で得られたデータは研究目的以外で使用するのではなく、コード番号によって管理を行うことで個人情報保護するための十分な処置をし、厳重に鍵のかかる保管庫で保管をする。研究終了後は一定の保存期間終了後に破棄をする。研究の成果は公表されるが、個人が特定できるような情報は公表されない旨を対象者には伝え、了承を得た。また、評価表の利用について平成28年度に2年次であった学生に対して、口頭及び文章で説明し、同意を得た。

本研究は、平成29年度高知学園短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。（承認番号第27号 平成29年8月4日）

結果

臨床実習評価表の「学生の注意すべき点」の自由記載部分をKJ法により質的に内容を分類し、さらにカテゴリー、サブカテゴリーにまとめた。

1. 臨床実習Ⅰ期について（表1）

カテゴリーは「評価」と「要望」の2つであった。カテゴリー「評価」のサブカテゴリーは『実習態度が真面目』、『積極性がある』であり、カテゴリー「要望」のサブカテゴリーは『専門知識が不足』、『体調管理に欠ける』、『積極性に欠ける』、『コミュニケーション力が不足』、『自信を持って欲しい』、『緊張しすぎる』であった。サブカテゴリーはこれらの8つに分類ができた。

カテゴリー「評価」のサブカテゴリー『実習態度が真面目』の内容では「真面目でよくがんばっていた」、「教えられた事を上手に行動に移せていた」等であった。学生は真面目な態度で実習に取り組み、自らが考えて行動をしたために疑問や質問が生まれたと思える。その疑問を指導者に言葉で伝えることで解決し、理解が深まったことで教えられた通りの行動ができたといえる。サブカテゴリー『積極性がある』の内容では「積極的に補助につく姿勢が良かった」、「実習に対する意欲を感じた」等であった。学生は診療の流れから自分の行えることを考えて自発的に補助につき、指導者に対しても意欲的に学ぶ姿勢であったと考えられる。つまり、カテゴリー「評価」では、学生が診療の流れを理解して自ら考えて行動することができ、その際に生まれた疑問や質問を指導者に尋ねることができていた。指導者の指示を正確に理解できたことで、指導者の意図した通りの動きをして、意欲的に学ぶ姿勢を表し評価を得ることができたといえる。

カテゴリー「要望」のサブカテゴリー『専門知識が不足』の内容では「清潔不潔の理解や治療手順が十分に把握できていない」等であった。学生は医療の場で基本となる清潔不潔の定義の認識が十分ではなく、治療に関する手順が正しく理解できていないことが考えられる。今後の学びを進めていく中で、専門的な知識の向上が求められている。サブカテゴリー『体調管理に欠ける』の内容では「体調管理に留意して欲しい」等であった。臨床実習を行う上で、学生は自身の身体を整えておく必要性があったといえる。サブカテゴリー『積

極性に欠ける』の内容では「積極的に目的意識をもって実習できると良かった」、「疑問点は質問をして欲しい」等であった。学生は診療に対して自ら補助につく等の行動を起こせず、疑問に感じたことを解決しないまま実習を終えてしまったため、目的意識が低く消極的だったと思える。サブカテゴリー『コミュニケーション力が不足』の内容では「患者とのコミュニケーションが不得意」、「大きな声と笑顔で対応して欲しい」等であった。学生の行ったあいさつや返事等の対応が十分ではなく、患者に敬意をもった医療人としての接遇にも不慣れだったと考えられる。指導者に対しても指示通りに進められたのか、理解できたのか等、自身の状況を伝えるというコミュニケーションが不足していたといえる。サブカテゴリー『自信を持って欲しい』の内容では「自信を持って対応ができれば良い」、「実力をつけて自信を持てるようになって欲しい」等であった。学生は習ったことを確実に覚えて正確に行えるよう、自身で練習を繰り返し行い臨床実習で経験を重ねていくことが必要だと思える。サブカテゴリー『緊張しすぎる』の内容では「患者と接する際に緊張しすぎる」、「緊張と照れから笑いながら指導を行っていた」等であった。気を張り過ぎたことにより態度や動きが学生自身の意図と異なる表現で、患者対応を行ってしまったと考えられる。つまり、カテゴリー「要望」では、医療人として基本である自身の身体を整えておくという自覚や、清潔不潔の定義の認識が不十分という医療の基本的理解が乏しかったと思われる。診療に対して学生は、自発的に行動を起こせず、問題解決をしないまま実習を終えてしまい、目的意識が低く消極的であると捉えられた。また、緊張から本人の意図と異なる対応を行ったことがあり、医療人としての接遇に不慣れであった。同様に、指導者に対してのコミュニケーションも十分では無かったといえる。

臨床実習Ⅰ期の結果より実習の評価として、学生は診療の流れを理解できており、主体的に行動をしている姿が明らかとなった。疑問を言い表して指導者に積極的に質問をすることができて、指

表 1. 臨床実習 I 期カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
評価	実習態度が真面目	目的意識を維持して欲しい。
		温和な雰囲気だが、芯はしっかりしている。
		十分補助等を行い、全く問題はない。
		周囲に良く気遣いができる。
		経験を積んでいけば問題ない。
		真面目でよくがんばっていた。
		非常に優秀と思う。
		I 期目としてはよい。
		疑問に思う事は質問して理解する等、総合的にすばらしかった。
		教えられた事を上手に行動に移せていた。
	積極性がある	仕事が好きになれば伸びる学生だと思う。
		真面目に実習ができ、往診にも付いてきて積極的であった。
		スタッフとすぐ打ち解け、初日から積極的に診療補助についていた。
		自分にできることを探し、補助についていた。
		手先がしっかりしており、素晴らしい歯科衛生士になるだろう。
		落ち着きがあり、積極的に補助につく姿勢が良かった。
		診療の流れを把握できており、積極的に補助にもつけていた。
		バキュームワークがとても上手だった。
		器具の準備や後始末などができていた。
		実習に対する意欲を感じた。
要望	専門知識が不足	今後の実習と学校生活で、知識を高めて頑張ってもらいたい。
		清潔域と不潔域の理解がまだ充分ではない。
		治療手順がまだ十分に把握できていない。
	体調管理に欠ける	体調管理に留意して欲しい。
	積極性に欠ける	治療中に他の方を見ていたので、やる気がないように思った。
		迷っている様子が見られたので、その度、気を使わず質問して欲しい。
		積極性にやや欠ける。
		もっと積極的に補助などにつくと、身につきやすかったと思う。
		内面にある疑問点を、積極的に表現できれば良い。
		積極的に目的意識をもって実習できると良かった。
		準備や片付けは積極的だが、もう少し治療を見学できたら良かった。
		不明な点があれば質問してと言ったが、最後までしてくれなかった。
		戸惑うことも多かったと思うが、もっと積極的に学ぶと良いだろう。
	コミュニケーション力が不足	朝早く来て、準備から始められたら良かった。
		患者とのコミュニケーションは不得意かと思う。
		連絡や報告などコミュニケーションをしっかりとって行動すると良い。
		積極性に優れていたが、患者とのコミュニケーション、笑顔が少なく感じた。
		どんどん発信・発言するともっとコミュニケーションが取れ良いと思う。
		高齢の患者もいるので、もう少し大きな声だと良かった。
		患者に対してのあいさつや声がけを大きい声で出来ると良い。
		こちらから話し掛けたいような表情をしていない。
		患者にもう少し笑顔で接してあげると良い。
	自信を持って欲しい	基本的なあいさつや返事をきちんとした方が良い。
		場数を踏んで習熟することが大切。
		自信を持って対応ができれば、もっと良いと思う。
		能力は高いが、まだ自信がなく不安なのだろう。
	緊張しすぎる	頑張ってもらって実力をつけて自分に自信を持てるようになって欲しい。
		人相手の仕事は、態度が大事。
		患者と接する際に緊張しすぎる。
		指導中に緊張と照れから笑いながら行っていたので注意した。

示を正確に理解し意欲的に学ぶ姿勢を表したことで評価を得ていた。その反面でさまざまな要望もみられた。学生は医療人としての認識が甘く、医療に対する基本的知識や理解に乏しいことと考える。診療に対して自発的に行動を起こせず問題解決をしなかったことから、目的意識が低く消極的と捉えられた。また周りとのコミュニケーションや、医療人として行う患者への接遇にも不慣れだったと思われる。

2. 臨床実習Ⅱ期について（表2）

カテゴリーは「評価」と「要望」の3つとなった。カテゴリー「評価」のサブカテゴリー『実習態度が真面目』、『積極性がある』は臨床実習Ⅰ期と同じであった。カテゴリー「要望」のサブカテゴリーは臨床実習Ⅰ期と同じ『専門知識が不足』、『体調管理に欠ける』、『積極性に欠ける』、『コミュニケーション力が不足』があり、臨床実習Ⅱ期では『学ぶ態度が乏しい』が分類された。カテゴリー「期待」のサブカテゴリーは『期待をもった励まし』であった。サブカテゴリーはこれらの8つに分類ができた。

カテゴリー「評価」のサブカテゴリー『実習態度が真面目』の内容では「診療のリズムなど整理ができていた」、「真面目な実習態度だった」、「知識を吸収しようとの姿勢が見られた」等であった。診療の流れを理解し、学生自らが考えて行動をする前向きな姿勢がみられ、指導者に対しても適切な態度で行動や質問ができていたと思える。サブカテゴリー『積極性がある』の内容では「真面目かつ積極的に実習を行えた」、「場に馴染むと積極的に力を発揮できると思う」等であった。学生は実習に対して真剣に取り組む、自らが進んで行動したといえる。つまり、カテゴリー「評価」では、学生の真面目な実習に対する取り組みにより、診療の流れを理解できたことで自発的な行動ができた。それは前向きな姿勢として表れており、指導者に対しても適切な態度で質問ができていたといえる。

カテゴリー「要望」のサブカテゴリー『専門知

識が不足』の内容では「安全配慮が不足」、「基礎的な知識や器具の名称や用途の理解が乏しい」等であった。学生は医療現場での配慮や危険の認識が不足しており、基礎的な知識が乏しかったといえる。サブカテゴリー『体調管理に欠ける』の内容では「体調管理は自身が理解をしていること」、「体調不良による欠席は社会人として失格」等であった。学生は無理なく実習が行えるように、自身の体調を整えておくという意識が必要であったといえる。サブカテゴリー『積極性に欠ける』の内容では「実習に対する積極性が足りなかった」、「目的意識がはっきりしない」等であった。学生の実習に対する取り組みが控えめであったことから受動的と捉えられ、明確な行動目標が立てられていなかったと思われた。サブカテゴリー『コミュニケーション力が不足』の内容では「あいさつや患者への声がけが小さい」、「積極的なコミュニケーションが必要」等であった。学生自身はコミュニケーションをとっているつもりでも、患者や指導者に伝わっていない場合があったと思える。サブカテゴリー『学ぶ態度が乏しい』の内容では「進んで行動や質問などがあれば良くなる」、「次を考えながら行動すること」等であった。学生の言葉遣いが適切でないことや、指導者に対して学ぶ姿勢が乏しかったといえる。つまり、カテゴリー「要望」では、学生は医療現場で起こりうる危険の認識が甘く、基礎的な知識が乏しかった。医療人であるという自己の意識を持った上で体調管理を行い、実習へ臨む必要があったといえる。コミュニケーションが患者や指導者に伝わりづらく、配慮や接遇にも不慣れだったと思われる。また明確な行動目標が立てられておらず、実習への取り組みが受動的であったため、学ぶ姿勢に乏しかったといえる。

カテゴリー「期待」の『期待をもった励まし』の内容では「経験を積んでいけば良くなるようになる」、「真面目だと思うので頑張ってもらいたい」等であった。このことは、学生が経験を積んだ将来への期待と励ましと思える。つまり、カテゴリー「期待」では、実習期間を通しての良い評価に加

え、目的意識を維持できた場合の将来的な期待をもった励ましであった。

臨床実習Ⅱ期の結果より、学生の自発的で真面目な取り組みにより、指導者に対して適切に行動や質問が行えていた。診療の流れを理解し行動ができたことで前向きな姿勢が評価された。その反面でさまざまな要望もみられた。学生は明確な行動目標を立てておらず、受動的で学ぶ姿勢に乏し

かったことが指摘された。医療現場での配慮や危険認識の不足、基礎的な知識の乏しさ、体調管理に対しても実習へ臨む意識が足りなかったといえる。また、さまざまな患者に対するコミュニケーションや接遇にも不慣れで、指導者への接し方やふるまいにも未熟な場面がみられた。その一方で、将来的な期待をもった励ましの内容もみられた。

表2. 臨床実習Ⅱ期カテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
評価	実習態度が真面目	実技はよくできていた。
		非常にがんばっていた。
		学ぼうとする姿勢も見られメモも良くとれていた。
		2期目の目標は十分にできていた。
		物覚えも早く、頭の回転も良い。
		落ち着いた感じで良かった。
		器材の洗い物や準備、診療のリズムなど整理ができていた。
		主訴を歯科医師にきちんと伝える事が出来ていた。
		学生から学ぶ所があった。
		患者とのコミュニケーションは経験が少ない現時点では十分だと思う。
		全体的に頑張って実習期間をすごしていた。
		言われた事や頼まれた事はしっかりできる。
		マナーもしっかりしていて、真面目な実習態度だった。
		明るく前向きに実習していた。
		基本的な器具は理解できていた。
		実習態度はまじめで、知識を吸収しようとの姿勢が多々見られた。
	積極性がある	真面目かつ積極的に実習を行えた。 自信がつき、場に馴染むと積極的に力を発揮できると思う。
要望	専門知識が不足	探究心を持って行動する。 安全配慮（患者に対して）が不足していた。 医療現場が危険と隣り合わせである認識を持っていない。 基礎的な知識が乏しい。
		器具の名称、用途が分かっていなかった。
	体調管理に欠ける	体調管理は自身が理解をしている事なので、無理なく実習をして欲しい。 体調不良による欠席は社会人として失格。
		積極的に行動すれば、さらにレベルアップできると思う。 もっと積極的に患者やスタッフに接すると良い。 実習に取り組む姿勢は真面目だが、少し遠慮がちに感じた。 患者の事を優先に動けると良い。 実習に対する積極性が足りなかった。 あくびをしていたので、実習に対する意識が少し低いと思う。 目的意識がはっきりしない。 早く学生のうちに、プロ意識を持った行動をとってほしいと思う。
	積極性に欠ける	積極的に行動すれば、さらにレベルアップできると思う。 もっと積極的に患者やスタッフに接すると良い。 実習に取り組む姿勢は真面目だが、少し遠慮がちに感じた。 患者の事を優先に動けると良い。 実習に対する積極性が足りなかった。 あくびをしていたので、実習に対する意識が少し低いと思う。 目的意識がはっきりしない。 早く学生のうちに、プロ意識を持った行動をとってほしいと思う。
	コミュニケーション力が不足	大きな声で対応して欲しい。 聞きとりやすい話し方ができるが、患者への声がけは緊張していた。 あいさつや患者への声がけが小さい。 積極的なコミュニケーションが必要。 患者とのコミュニケーション（笑顔）乏しかった。 笑顔が少ない。

	学ぶ態度が乏しい	姿勢をよくすれば、もっと印象が良くなる。
		指示や注意を受けても聞き入れない。
		院内の立ち振るまいが気になった。
		一步先の事を考えて行動して欲しい。
		メモを取る姿がなかった。
		言葉遣いが気になる。
		質問が少なく、間違いも多かったので、やる気が感じられなかった。
		緊張感をもって実習にのぞんだほうが良い。
		進んで行動や質問などがあれば良くなる。
		次に何をしなければならぬか考えながら行動すること。
		いい先輩を見つけて学んで欲しい。
期待	期待をもった励まし	今後の現場で経験を積んでいけば良くなるようになる。
		患者さんの為に一生けんめいになれる歯科衛生士になるだろう。
		真面目だと思うので、頑張ってもらいたい。

考察

カテゴリー「評価」の中で、臨床実習Ⅰ期と臨床実習Ⅱ期に共通したサブカテゴリーとして『実習態度が真面目』と『積極性がある』がある。これらの内容は、学生は診療の流れを把握することができ、指導者からの指示を正確に理解し、積極的に質問をしていた。実習に対し真面目な取り組みで、意欲的に学ぶ姿勢が表れていたということである。このことは、技術面だけでなく学生の人となりに対するものまで幅広い評価がされていたといえる。

藤原⁸⁾によると、学内での講義や1年次後期に見学を目的として実施する基礎実習では、学生主体で教育が進められ、指導者のサポートが受けやすい状況である。しかし、臨床実習では診療の中で学びを進めるため、状況によっては直ぐにサポートを受けられず、自らの判断が必要な場面もある。そのような状況を学生が認識し、自ら行動し努力ができれば主体的な学びになると示している。学生は学内で得た知識と技術を臨床で応用する一連の過程を、歯科医師と歯科衛生士の動きから学び、自身が行うものと捉え理解を深めることで専門的知識や技術を身に付けていくと考える。

また原山⁹⁾は、臨床実習において知識や行動に見通しがつかない状況におかれた学生は、気持ち落ち着かず不安感が心を支配する。しかし、患者からお礼を言われた経験や、指導者から褒められて認められたという状況が起きると気持ちが

救われて不安が解消される。そうした経験が起これば、自らを高めるために新たな目的意識を持ち、それに向け行動をしていくということが述べられている。学生に対して患者の理解や指導者からの助言や、あたたかい見守りがあることは積極的な行動への動機付けとなり、意欲のある学びに繋がると考える。学生は、その積極的な行動から疑問をみつけ、解決する力をつけていけるのではないかと推測される。

カテゴリー「要望」の中で、臨床実習Ⅰ期と臨床実習Ⅱ期に共通したサブカテゴリーには『専門知識が不足』、『体調管理に欠ける』、『積極性に欠ける』、『コミュニケーション力が不足』があった。その内容は、学生の医療現場での配慮不足や基礎的な知識の乏しさ、体調管理に対しても実習へ臨むにあたって、責任意識が十分では無いという指摘であった。

『積極性に欠ける』の内容では、学生が自発的な行動を起こしておらず、自ら問題解決をしなかったことから目的意識が低く、消極的と捉えられたと思える。また臨床実習Ⅱ期では、臨床実習Ⅰ期の直後でもあり、指導者は学生に対して積極性や専門的知識の高さを期待したが差異があったことから、評価に表れたと考えられる。そのために評価内容は厳しく、学生によっては明確な行動目標が立てられていないことや、実習に対して受動的であったことから学ぶ姿勢に乏しかったと指摘された。

体調管理について、中本ら¹⁰⁾による高齢者施設や障がい者施設、幼稚園での口腔衛生指導等を行うことを目的としている臨地実習と臨床実習を比較した研究がある。その結果は、臨床実習では欠席率が高かったと示されている。臨床実習では知識や技術に加え、多様な人々とのコミュニケーションや協働をしていく能力が必要となる。そのことが学生の精神的、肉体的負担が大きくなる要因であったと述べられている。しかし、医療人を目指す上で自己の体調管理は必要となるものであり、身体へ無理な負担をかけることなく、しなやかな心をもって過ごせるよう整えていくことが大切だと考える。

『コミュニケーション力が不足』の内容からは、学生の周囲に対する態度が適切でなく、緊張をしていたことも考えられ、患者や指導者に対して積極的に関わるといことが十分ではなかったと推測される。中村ら¹¹⁾は、コミュニケーションとは、日常的に行われる一言のあいさつも相手を認めるという重要なものであり、互いの情報共有や行動変容につながる働きがあると述べている。本学において、授業以外でも学生と関わりをもつ中で、教職員による声掛けは日頃から行っていることである。今後はそれに加えて学内実習等でも、あいさつの持つ意味や重要性について説き意識付けを行うことを考えている。そして、学生が気を張り過ぎずに行えるような声かけの方法を考えていくことも必要である。また鈴木¹²⁾はコミュニケーションのプロセスは、普通ではないという異常に気づき、それを的確に伝え、正確に受け取るということである。その行為には、物事を深く観察できる力が必要であると述べている。このことからコミュニケーションがもつ働きを理解するということは、認知ミスや誤判断といったヒューマンエラーを防ぐという医療安全の観点からも重要だと思われる。学生には実際の臨床現場の中でも、医療人としてのコミュニケーション力を発揮できるように教育をしていきたいと考える。

藤原ら¹³⁾によると、歯科医師は歯科医院における対人サービスの業務分担を歯科衛生士に対し

て期待をしており、教育の充実を要請する気持ちがひととき強いと考えられる。同時に、歯科衛生士業務を統合した能力として発揮できるプロフェッショナルを求めているのではないかと考えられると述べている。学生には歯科衛生士という専門性の高い職業に就くという意識を強くもって欲しいと考える。そして、多職種から厚い信頼を得られるような知識と行動が伴う応用力へ繋がる教育を検討していきたい。

臨床実習Ⅰ期のサブカテゴリー『自信を持って欲しい』、『緊張しすぎる』が臨床実習Ⅱ期では無くなっている。これは学生が臨床実習の場に適応でき、慣れてきたからだと思える。古賀ら¹⁴⁾は、6週間の臨床実習において前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）のいずれの能力要素についても上昇し、特に前に踏み出す力（アクション）が臨床実習により向上することが示唆されたと述べている。学生は実習先医院の慣れない環境の中、不安な気持ちで過ごした経験が、臨床実習Ⅱ期では自信となり、前向きに実習ができたのではないかと考える。

一方で、臨床実習Ⅱ期のサブカテゴリーには『学ぶ態度が乏しい』がある。これは慣れない環境の中、不安な気持ちで過ごした臨床実習Ⅰ期を経験したことで、少なからず慣れが生じたことが要因ではないかと思われる。慣れる反面、精神面で少しの余裕が生まれたことが気の緩みとして態度に表れてしまったと推測される。

また、臨床実習Ⅱ期ではカテゴリー「期待」が増え、将来的な期待をもった励ましもあった。このことから、指導者が学生を理解し、あたたかい見守りがあったと考えられる。

これらの考察から、歯科医師と歯科衛生士が歯科衛生士教育に期待する内容をふまえ、学内での教育内容の検討を次に挙げる。

1. 本学と実習先が共通理解を深める教育内容や指導項目の検討

結果から、学生は明確な行動目標が足りず、取

り組みが受動的で学ぶ姿勢に乏しかったという指摘があった。その一方で、学生は学内で得た知識と技術を臨床で応用するための一連の過程を、歯科医師と歯科衛生士の動きから学びとることができた。そこから自ら考えることで、専門的知識や技術を身に付けていったという内容があった。患者の理解や指導者からの助言、あたたかい見守りがあることも積極的な行動への動機付けとなり、意欲のある学びに繋がった内容もみられた。このことより、積極的な行動のきっかけを作るために、明確な指導の検討を学内と実習先の指導者によって行うことを考えた。

現状では、学生は臨床実習Ⅰ期および臨床実習Ⅱ期の前にオリエンテーションを実施している。その中で実習に臨む基本姿勢について、Ⅰ期およびⅡ期の目的や到達目標、日誌の記録方法、注意事項の伝達等を行っている。臨床実習前に行う学内実習としては、歯科材料等の基本的な取り扱いと診療補助や介補技術を復習する機会を設けている。実習先医院へは学生が実習前に訪問をし、あいさつと打合せを行っている。また、臨床実習までに履修が済んでいる科目名と臨床実習評価の基準については、実習先医院へ歯科臨床実習マニュアルを提示している。

田村ら¹⁵⁾によると、一律に臨床教育内容の統一を図ることは難しく、実習先により実習内容に偏りが生じていることが報告されている。さらに教育目標は養成機関が作成し、学生と臨床実習指導者と共有しなければ、教育の目的を達成することは困難である。さらに教育効果の高い評価方法としてはOSCE等を導入、実施し臨床実習に反映させることも有益であると指摘している。本学の検討としては、履修が済んでいる科目から学生が得ている知識と技能を項目として挙げることを考えている。その項目内容を実習先の指導者が確認できるチェックリストとして提示し、指導者と本学教員間で共通理解をしていきたいと考えている。

また実習先医院で事前にオリエンテーションを行うことで学生と指導者との間で意思の疎通を図

り、それぞれが実習期間に実現できる目的や目標を確認し合うことの必要性があると考え。畠中ら¹⁶⁾は、臨床実習生は全般的に積極性に欠け、適切であるという評価は少なかったが、指導された後は改善し努力する傾向がある。特に歯科衛生士の指導者との意思の疎通を緊密にし、教育者として共通の認識のもとに、臨床実習教育をしたいと述べている。このことから学生と指導者が目的や目標を確認し合い、その内容を本学教員も把握することで学生の意欲のある学びに繋げていきたいと考える。

また小澤ら¹⁷⁾は、指導者は疑問をもっている学生に対しては、具体的な問いかけをし、発言しやすい状況を作り、話し合う場を持つ必要がある。そして、指導者も積極的に学生と関わりを持つことの必要性が示唆されたと述べている。このことから、指導者と本学教員は実習に際して、指導方法に関する疑問や情報を共有することから、学生の行動変容へ向けた教育につながると考える。

以上のように、本学教員と指導者が共通理解をもつために、指導項目についてのチェックリストを作成するように今後は考えている。学生と指導者においては、事前にオリエンテーションを実施することで意思の確認を図り、実習期間に達成することがきる目的や目標を明確にしたいと考える。また、指導方法についても指導者と本学教員間で情報の共有を行い、教育の検討をしていきたい。

2. 臨床実習Ⅰ期から臨床実習Ⅱ期へ指導の引き継ぎについての検討

結果から、臨床実習Ⅱ期は臨床実習Ⅰ期の直後でもあり、指導者は学生に対し積極性や専門的知識の高さを期待したと思われた。しかし、学生は受動的であったことから学ぶ姿勢に乏しかったと指摘された。このことから、臨床実習Ⅱ期に対する指導者の期待と、学生の臨床実習Ⅰ期終了時の習得状況を双方が把握し、達成可能な行動目標を設定することが必要であると考えた。

考察1.で述べたように、学生と指導者間で事

前にオリエンテーションを実施することで、実習期間に達成可能な目的や目標を明確にすることができる。それに加えて、臨床実習Ⅰ期から臨床実習Ⅱ期への指導内容を学生と本学教員によって引き継ぎをすることで、臨床実習Ⅱ期の実習内容も明確になると考える。

現状として、学生は臨床実習Ⅰ期終了後に学校へ戻り、反省会と臨床実習Ⅱ期のオリエンテーションを行っている。今後はその時間を用いて次の方法で行うことを検討した。①学生が臨床実習Ⅰ期に達成できた目標や十分でなかったことを明確にする。②学生は臨床実習Ⅰ期の反省を基に、臨床実習Ⅱ期に学びたいこと、達成したい目標を挙げる。③本学教員がそれを確認し助言をする。④臨床実習Ⅱ期の実習先の指導者に対して、学生がその内容を提示する。⑤臨床実習Ⅱ期の目標が達成可能か双方で確認をする。

このように、指導者と学生、本学教員が学習状況と指導内容を共有し、臨床実習Ⅱ期で達成可能な目標を掲げられると思われる。それによって、学生は実現できる目標が明らかとなり、積極的に学ぶための動機づけへ繋がると考えられる。また、指導者は学生に対して的確な項目が指導できると推測する。

以上のことから、臨床実習Ⅱ期に対して指導者の持つ期待値の高さと現状の学生の習得状況を鑑み、達成可能な目標を掲げることが必要と考えた。それには、まず学生が臨床実習Ⅰ期に習得できたことを自身で把握をすることである。そこから不足した内容を臨床実習Ⅱ期で習得したい事項として挙げ、学生が実習先の指導者に示し指導を仰ぐということを検討したい。

3. 学内実習の充実

結果から、学生の医療現場での配慮不足や基礎的な知識の乏しさという指摘の中には、知識をもった上で考えて応用していく能力が含まれていると推測する。

現状では、学内の授業の工夫の一つに、講義の後に実習関係がくるように計画をして、知識と技

術が一致する取り組みをしている。

診療補助実習に含まれる医療安全についての教育では清潔不潔の認識、身だしなみや心構え、環境整備、清掃保全等の基礎的な項目をそれぞれの実習で共通して行っている。中島¹⁸⁾は医療安全とは、医療人として生涯に渡って研鑽すべき分野である。医療事故の発生要因には、当事者の行動やヒューマンファクターにかかわる要因（確認や知識の不足、技術の不足、コミュニケーションエラー、情報伝達の不備）、環境や設備機器の不具合等があげられる。安全の確保には、なぜ危険なのか、どのように事故を回避すれば良いのか、安全を担保するための方策は何かを理解することが重要であると述べている。この指摘からも日常的な動作の中にどのような根拠があり、どのような意味をもって、何のためにするのかを考えるよう働きかけて進めていく指導が重要であると考ええる。そして学生が自らの行動に対する認識を深め、一つ一つの動作を確認しながら行っていくように指導を行っていく必要がある。

また中村ら¹⁹⁾は教育とは学習者の行動の知識、技能、態度に価値ある変化を起こさせることである。歯科衛生士教育においても講義や実習で学んだことを基盤とし、臨床の場で患者実習を通して歯科衛生士として必要な態度、知識、技能を身に付け医療人として問題解決能力を養うことは重要だと述べている。学生が臨床で応用していける実践的な専門的知識が養えるように、学内実習から工夫をしていきたいと考える。

以上のように、教員は学生が自らの行動に対する一つ一つの動作を正確に行うことができるようにするための工夫を考える必要がある。専門性の高い歯科衛生士という職業に就く意識と、多職種からの厚い信頼を得られるために必要な知識と行動が伴う指導を検討していきたい。

4. 学年を越えた実習の在り方の検討

結果にある、サブカテゴリー『コミュニケーション力が不足』や『緊張しすぎる』から考えられることとしては、社会経験が浅い学生は慣れない場

所では緊張をしたものと思われる。

本学の授業の取り組みとして、2年次と3年次に高知市内の幼稚園や保育園、小学校、中学校と特別支援学校への口腔衛生指導を行っている。それぞれの年齢を対象とするには、口腔の状況に関する専門的知識と相手に合った適切なコミュニケーションが必要となる。学生は経験を重ねていく過程で対象に合った声量や話し方、反応をみながら言葉を選び、相手と同じ目線で接するために姿勢を低くするという技術を体得する。3年次生と2年次生が同じ対象に指導を行う場面も設定している。3年次生と一緒に実施することで2年次生は多くの学びを得られている。

また学内では、学年間でのアクティブ・ラーニングとして、う蝕予防処置の実習での取り組みがある。2年次生が術者や補助者となり、1年次生を患者として口腔衛生指導を行っている。患者である1年次生の口腔の状況に合った清掃道具や方法の選択、指導計画、実地指導票の記入が行えること等に加えて、コミュニケーションをとりながら指導を行うことを目標としている。松田²⁰⁾はコミュニケーションにおいて表現する手段として、言葉や文字等による言語、声の大きさやトーン等による表情や態度といった非言語による手段があると述べている。受け手は言葉だけでなく、人間が持つあらゆる感覚機能を駆使して、これら多くの表現を瞬時に受けとり、組み合わせることで送り手の意図を理解するという。実習を通して、言葉だけではない多くの表現を用いた接し方の工夫や、患者としてそれを受けた際にどう感じたかを会得して欲しいと考える。それには多くの情報でコミュニケーションをとることの重要性に気づき、常に人が相手であるという認識のもとで進めていく教育の検討が重要である。

以上のことから、コミュニケーション力の向上を教育していくには、学生自らが気づくことが必要だと考える。それに対して教員は押し付けるのではなく、個々の学生が、その方法を理解できるように助言を行うことが重要だと考える。そして、気づき感じとったことを学生間で共有して、向上

し合える場の検討も行っていきたい。

まとめ

本研究によって、以下のことが明らかになった。

1. 学生の実習に対する評価には、意欲的に学ぶ姿勢があった、真面目な態度であった、考えて行動ができていた、診療の流れを把握できている、自発的に診療補助や介補につけていたという内容があった。
2. 一方で学生の実習に対する指摘には、明確な行動目標が立てられていない、学ぶ姿勢に乏しい、医療現場での配慮が不足している、基礎的知識に乏しい、患者や指導者とのコミュニケーション力が足りないという内容があった。

得られた結果から検討した教育内容は、次の通りである。

1. 本学と実習先医院において、教育内容や指導内容の共通理解を深めるために、指導者と本学教員間で指導内容や情報の共有を行い、教育内容の検討をすることとする。
2. 臨床実習Ⅰ期から臨床実習Ⅱ期へ指導の引き継ぎについての検討として、不足している指導内容について学生と本学教員がチェックリストを作成する。そのチェックリストを学生が実習先の指導者に示すことで、指導者は不足している指導内容を確認できる。学生は習得状況に合った達成可能な目標を立てることができると考えた。
3. 学内実習を充実させることで、知識と技術を統合させた専門的知識を身につけ、医療現場で正確な行動がとれるよう、意識づけられると考察した。
4. 学年を越えた実習の在り方について、コミュニケーション方法を会得していく過程で、学生間での気づきの共有をしていける自主的な学びの場を設ける必要性が明確となった。

謝辞

本研究の実施にあたり、日頃より臨床実習先と

して本学学生を受け入れて下さっている歯科医院の歯科医師の先生方、そして、歯科衛生士の方々に御礼申し上げます。

また本論文を作成するにあたり、助言をいただきました本学参与梶本市子先生に心より感謝し、御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部省・厚生省令第1号、歯科衛生士学校養成所指定規則, **1950**.
http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=325M50000180001&openerCode=1
- 2) 全国歯科衛生士教育協議会監修, 最新歯科衛生士教本歯科衛生学総論, **2015**. 2, 医歯薬出版株式会社, 14.
- 3) 金澤紀子, 歯科衛生士の展望と課題: 医療・介護との連携を目指して, 日本補綴歯科学会誌, **2014**, 6巻3号, 267-272.
- 4) 日高勝美, 超高齢社会に求められる歯科衛生士のキャリア: 教育・研究者の養成と業務のあり方を考える, 日本補綴歯科学会誌, **2014**, 6巻3号, 279-284.
- 5) 全国歯科衛生士教育協議会作成, 歯科衛生士教育コア・カリキュラム: 教育内容ガイドライン改訂版, **2015**.
- 6) 吉田好恵, 臨床予備実習における評価表の有用感に関する調査, 鶴見大学紀要, **2014**, 第51号, 第3部, 103-108.
- 7) 海老名和子, 臨床実習における学生の事前自己評価と自己評価の効果について, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **2010**, 第24号, 35-44.
- 8) 藤原奈津美, 柳沢志津子, 中江弘美, その他, 歯科衛生士養成臨床実習における学習プロセスに関する質的分析, 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2014**, 第5巻1号, 39-45.
- 9) 原山裕子, 上田祐子, 後藤君江, その他, 臨床実習中の歯科衛生士養成校学生に心理的影響を与えた出来事とその対処の内容および感

情分析, 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2016**, 第7巻2号, 110-121.

- 10) 中本千朱佳, 畠中能子, 細見環, その他, 臨床実習での歯科衛生士学生の体調不良, 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2017**, 第8巻2号, 113.
- 11) 中村千賀子, 吉田直美, みるみる身につく歯科衛生士のコミュニケーション力, **2014**. 8, 口腔保健協会, 10-11.
- 12) 鈴木温子, 歯科診療所におけるコミュニケーション・リスクに関する調査, 日本歯科衛生学会雑誌, **2008**. Vol 2 No. 2, 62-71.
- 13) 藤原愛子, 有泉裕吾, 田島睦子, その他, 今後の歯科衛生士教育に関する歯科衛生士及び歯科医師の意識調査, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **2002**, 第16号, 171-177.
- 14) 古賀恵, 永田英樹, 大岡知子, その他, 歯科衛生士学生の社会人基礎力とその育成: 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2017**, 第8巻2号, 109.
- 15) 田村清美, 中垣晴男, 松井恭平, その他, 日本の歯科衛生士教育における臨床実習の現状, 日本歯科衛生学会雑誌, **2008**. Vol 3 No. 1, 61-67.
- 16) 畠中能子, 花谷早希子, 中山真理, その他, K 短期大学における歯科衛生士臨床実習生像: 臨床実習終了後の実習施設アンケート結果より, 日本歯科衛生学会雑誌, **2008**, Vol 3 No. 1, 157.
- 17) 小澤純子, 小松陽子, 北香緒里, その他, 歯科臨床実習における学生の自己評価と実習指導歯科衛生士評価の相違に関する検討, 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2017**, 第8巻2号, 112.
- 18) 中島丘, 医療安全を獲得するための教育項目の提言: 歯科衛生士教育により, どのようなことを身につけてもらいたいのか, 日本歯科衛生教育学会雑誌, **2016**, 第7巻1号, 32-38.
- 19) 中村郁絵, 宮坂孝弘, 宮坂芳弘, その他, 臨床実習におけるコア・カリキュラムを活用し

た歯科衛生士教育の取り組み，日本歯科衛生
教育学会雑誌，**2016**，第7巻2号，203.
ネット，16.

- 20) 松田美幸，歯科スタッフのためのケア・コ
ミュニケーション，**2011**. 3，株式会社ウイ

受付日：平成30年1月11日

受理日：平成30年2月9日

Original Paper

The Considerations to the Educational Contents Aimed at Better Education for Dental Hygienists

Tomoko UCHIDA^{1*}, Yuka OONO¹, Yuko NAKAISHI¹, Mayumi SAKAMOTO¹,
Kayo NOMURA¹ and Saki WAJIKI¹

Abstract: There are growing expectations and needs such as improvement and enhancement of education for dental hygienists and training students so that they can work as professional dental hygienists soon after their graduation. In second year at this junior college, clinical training, which offers the students the opportunity to practice their specialized knowledge and skill, to have higher abilities to apply them, and to enhance their self-awareness, is carried out. This time, we qualitatively classified the contents, which were included in the free writing field of an evaluation list on clinical training written by the dentists and dental hygienists who instructed their students during the clinical training, on the basis of KJ method. And we summarized those contents into the ones about expectations to the education for dental hygienists, and then, considered the future contents of education. The evaluations of the training were the ones that the students had the attitude to learn actively, that they could understand a series of the flow of dental treatment, and that they could assist these treatments spontaneously, etc. The indications to the training were the ones that they didn't have any clear-cut goal of their behavior, that they knew little about the basic knowledge, and that they were deficient in the ability to communicate, etc. The possible considerations to the educational contents are as follows: 1. Consider what contents and teaching items are needed so that both instructors of this college and instructors of the clinical training can promote better understanding of them. 2. Consider how to take over the directions between clinical training first term and clinical training second term. 3. Consider how to enrich the training within this college. 4. Consider how to train the students regardless of their school year. As the necessity of these considerations has become clear, we report them.

Key words: education for dental hygienists, considerations to the educational contents, evaluations of the clinical training

¹ Kochi Gakuen College, Department of Medical Hygiene, Dental Hygiene Course, *Email: tuchida@kochi-gc.ac.jp